2023年3月19日 礼拝メッセージ

聖書:ルカの福音書17章11～19節
説教:あなたの信仰が

はじめに

ここで起きている出来事はそれほど複雑ではありません。ツァラアトに冒され十人が癒やされ、神に感謝しながらイエスの所に引き返してきた一人にイエスは励ましのことばをかけてあげた。そんなイエスによる癒しの奇跡が描かれています。でもそれがすべてなのでしょうか。そう考える理由があります。少しさかのぼりますが、15章のところでイエスが取税人や罪人たちをいっしょに食事をしているとパリサイ人、律法学者たちが文句を言った場面がありました。そこからイエスは、たとえ話を用いながら神がどれほど私たちを愛し、救おうと心を砕いておられるのかを語り、パリサイ人の信仰の間違いを指摘する。そんな流れが前回のところまで続いていたのです。ところが今日の箇所では場面が変わってパリサイ人は出てこない。ではパリサイ人のことは終わったのかと思うと、20節からまたパリサイ人が出てくるのです。そうすると、今日の箇所もパリサイ人となにか関係があるのではないか。いったいどんな関係があるのか、私たちにどんなことを教えようとしているのか。そんな目で今日の箇所を見てまいります。

１　サマリアとガリラヤの境

１）サマリア人

11節。「さて、イエスはエルサレムに向かう途中、サマリアとガリラヤの境を通られた。」

サマリヤとガリラヤの境。この場所がどれほど特殊なところか。イスラエルの歴史を振り返ると見えてきます。時代は、ソロモンが亡くなって、国が北王国イスラエルと南王国ユダに二つに分かれてしまった頃のことです。北王国は外国の勢力に攻め込まれ、そこから様々な異教の神々が入って来て信仰的に堕落していきます。北王国の首都がサマリアという町に置かれていたことから、彼らはサマリア人と呼ばれるようになり、南王国の人々は蔑んでいて、イエスの時代には、ガリラヤ地方の人々も付き合いをしていなかった。そういう事情があった。そうすると、サマリアとガリラヤの境がどんな場所かわかるでしょう。言うならば、犬猿の仲の状態であった二つの民族の真ん中をイエスは通って行かれたことになります。

２）私たちをあわれんでください

さてイエスがある村に入ると、ツァラアトに冒された十人が、遠く離れたところからこのように叫びます。13節。「イエス様、先生、私たちをあわれんでください。」

ツァラアトとは重い皮膚病とも訳され、発症してしまうと、人里離れたところにある難民キャンプのような場所に隔離され、そこで人から施しを受けながら細々と暮らさなければならない。そんな難民キャンプがサマリアとガリラヤの境にあった。つまり、サマリアからも、ガリラヤからも見捨てられた人たちがそこに住んでいたのです。ここに登場する十人。そこにはサマリア人もいればガリラヤ出身のユダヤ人もいて、同じ境遇に突き落とされた者として、互いにいたわり合っていたのだろうと思うのです。

そんな彼らは、遠くに離れて立ってイエスに叫びます。「私たちをあわれんでください。」

２　イエス

１）行って祭司に見せなさい

イエスはこう言われます。14節。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」

なぜ祭司に見せなさいと言われたのか。これも説明が必要です。レビ記14章2節から7節が根拠です。少し長いのですが、大切なことが書かれているので読みます。「ツァラアトに冒された者がきよめられるときのおしえは、次のとおりである。彼が祭司のところに連れて来られたら、祭司は宿営の外に出て行く。祭司が調べて、もしツァラアトに冒された者の、その患部が治っているなら、祭司はそのきよめられる者のために、二羽の生きているきよい小鳥と、杉の枝と緋色の撚り糸とヒソプを取り寄せるように命じる。そして、生きている小鳥を、杉の枝と緋色の撚り糸とヒソプとともに取り、それらをその生きている小鳥と一緒に、新鮮な水の上で殺された小鳥の血の中に浸す。それを、ツァラアトからきよめられる者の上に七度かけ、彼をきよいと宣言し、さらにその生きている小鳥を野に放す。」

今の時代は、なにかあればお医者さんが病気の診断をします。しかし聖書の時代、特にツァラアトについては祭司が診断するように定められていて、ツァラアトが治ったことがわかれば祭司がこれを公に宣言する。そこで初めて自分の家に帰ること

ができる。そういうシステムになっていた。「祭司に見せなさい」とはそういう意味です。

そんな彼らはどうなったか。14節後半。「すると彼らは行く途中できよめられた。」イエスからことばをいただいたときには、何も変化がなくて、歩いている途中で癒やされたということです。これは考えさせられます。誰でもイエスからおことばをいただいたなら、すぐに癒やされると期待するでしょう。ところがなにも奇蹟は起きない。それなのに祭司のところへ行きなさいと言われ、とにかく行くことにした。そうしたら途中で癒やされた。これが何を意味するのかは、また後で触れたいと思います。

２）サマリア人が引き返してきた

この話はこれで終わらず続きがあります。15，16節。「そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。」

その十人がいまイエスのことばによって癒やされました。しかしイエスのところに帰って来たのは一人だけ、それもサマリア人だった。これはどういうことか。イエスは17，18節でこう言われます。「十人きよめられたのではなかったか。九人はどこにいるのか。この他国人のほかに、神をあがめるために戻って来た者はいなかったのか。」

イエスはこの人を他国人とも呼んでいます。また、イエスのところに戻ってこなかった他の九人を責めているようにも聞こえます。神に応えていただいたのに、神に感謝もしないひどい人たち。だから私たちは、神の恵みに感謝して日々歩んでいきましょう。そんな話しなのかとも思ったりします。

３　信仰

１）見えないものを信じる

しかしよく注意してください。この十人はどうして癒やされたのか。いつ癒やされたのか。そのことをもう一度確認します。先ほども触れたように、イエスから「行って、自分のからだを祭司に見せなさい」と言われたたときはまだ癒やされていません。けれども、十人は祭司の家に向かった。なぜ向かうのか。癒やされないと思ったら行きません。無駄ですから。でも行ったということは、必ず癒してくださると信じたからですよね。言い換えれば、まだ見ていないものをそこにあるかのように信じたということになる。ヘブル書11章1節にこうあります。「信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」まだ起きていないことを必ず起きると信じた。これこそまさに信仰です。信仰によって癒やされました。

問題はその後です。十人のうち一人だけが戻って感謝したのに、他の九人は感謝もしなかった。では救われたのは誰か。戻って来た一人だけが救われて、他の九人は救われなかった、ということですか？違います。十人は信仰によってすでに完全に救われています。また、一度与えられた救いは、後になってから取り去られることはありません。たとえ、イエスのところに戻らず、感謝もしなかったとしても、救いはそのままなのです。

２）「あなたの信仰があなたを救った」

では19節でイエスが語ったことばはどういうことなのでしょう。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」他の九人にはこのようなことばはかけられなかった。だから彼らは救われなかった、ではありません。何度も繰り返します。九人は救われています。しかしイエスのところに戻ったこのサマリア人は、恵みの上にさらに恵みを与えてもらい、親切なことばをいただいて送り出してくれた。そのようにとらえていただきたい。

３）この他国人の他に

さて、この箇所はパリサイ人のことと関係があるのではないか、そんなふうに申し上げました。そのことはどうなるのか。先ほども説明したようにユダヤ人はこう考えていました。サマリア人は神から見捨てられた者たちで絶対に救われない。そのような思想の先鋒に立っていたのがパリサイ人です。ところがどうですか。そのサマリア人が救われ、それだけではなくサマリア人だけが神に感謝をし、イエスからさらに励ましのおことばをいただいていく。彼らにとってまったく腰を抜かすようなことが起きています。

サマリア人に関する意外な話はここだけではない。ルカの福音書10章には、「善きサマリア人」というタイトルのたとえ話しがあります。こんな話しです。強盗に襲われて意識不明で道に倒れていた人たいたとき、誰がこの人の隣人となったのか。祭司ではなく、神殿に仕えていたレビ人でもなかった。むしろ人々から差別され、のけ者にされていたサマリア人が倒れていた人の隣人となって、傷の手当てをし、宿に連れて行き、治療費まで出した。そういうたとえ話でした。

パリサイ人は、サマリアとを軽蔑し、彼らは救われないと決めつけ、律法を守る自分たちこそ救われていると考えていました。しかしイエスは救いに関してまったく異なることを語ります。ユダヤ人だけが救われるのではない。他国人であるサマリア人も救われていく。なぜ救われるのか。非常に単純です。彼らはこう叫びました。「先生、私たちをあわれんでください。」自分はあわれな者である。これを言えたから。普通に暮らしていれば、自分があわれんでもらわなければならない者だとは、誰だって思いません。その結果、神に救いを求めることはありません。でも、いつか私たちは哀れな自分であることに気がついていく。そのとき、だれに叫ぶのでしょう。神に叫ぶことができる。そして神はこう応えてくださる。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」

４）イエスの血によって

では、イエスはどのようにしてツァラアトに冒されている人たちを癒やしたのでしょう。ことば一つで救われた。もちろんそうです。けれども忘れてならないことがあります。先ほど読んだレビ記には、ツァラアトが癒やされた者の上に、祭司は殺された小鳥の血をかけるように命じていました。病が癒やされるには、誰かの血が流される必要があるのです。誰が血を流すのでしょう。もう小鳥ではない。イエスが血を流してくださる。イエスの血によって、彼らは完全に癒やされ、救われていく。あなたはそれを信じなさい。たとえ、祈り願ったことが今は結果として見えなくても、信じて前に進みなさい。あなたの信仰があなたを救うのだから。

イエスはこのように語ってくださいます。